第三節　過敏性など随伴することについての理解

自閉症のある子どもには，感覚知覚の過敏性・鈍感性，シングルフォーカス，情動のコントロールの困難さ，遅延模倣，フラッシュバック等がみられます。

ここでは，随伴する様々な理解しにくい行動について，特に，過敏性の問題とシングルフォーカスの問題について述べてみたいと思います。

1．過敏性の問題

自閉症のある子どもの顕著な特性として感覚刺激への過敏性等感覚知覚の問題があげられます。空調機器等の低周波の律動音等に興味を示す反面，特定の人の声等には極端な恐怖を示したり，ガラスを爪で引っ掻いたような音には平気だったりすることがあります。また，他の人はおそらく興味を示すこともないような銀紙やセロファン等の光るものに強い興味を示したりする子もいます。

このように，個人差はもちろんありますが，視覚，聴覚，触覚，味覚，嗅覚などの感覚異常（過敏と鈍感）が多くの自閉症のある子どもに認められます。

この感覚知覚の問題が，苦痛や恐怖の原因あるいは偏食の原因となっていることも十分考えられます。本人の困難性の本質により近い，むしろ自閉症の核心部分と言えなくもありません。

（1）学校における様々な行動

運動会や学芸会あるいは卒業式などの学校行事を苦手としている自閉症のある子どもは結構多いものです。その時期になると荒れ出し，対応に困ってしまうということを毎年繰り返している学校や家庭は多いのではないでしょうか。この場合，日程の変更による混乱とともに，子どもにとっては過剰な音刺激等による混乱ということが考えられます。同様に，交流行事でパニックを起こしている例も多くありますが，この場合も，大勢の出迎え，マーチングバンドなどの音楽，歓迎するあまりの過剰な接待等が大きな影響を与えているものと考えられます。

どうしても学校のトイレを使わない子どもをよく観察してみると，どうやら用便後の水の流れる音を怖がっていたということもそう珍しいことではありません。

一生懸命で熱心な先生なのに，自閉症のある子どもからは受け入れられず敬遠されているような先生もいます。熱心な話しかけや働きかけも，子どもにとっては過剰な関わりと感じられ迷惑なことなのでしょう。初対面で，いきなり話しかけることや抱き上げることなども自閉症のある子どもにとっては恐怖となることが考えられます。元気でエネルギッシュな先生は自閉症のある子どもにとっては苦手という傾向があるかもしれません。

（2）対応の考え方

このような感覚知覚面の問題は，自閉症のある子どもの教育を考える場合，非常に重要なポイントとなり，対応の際の大きな留意点となります。

子どもが混乱を示していたり，パニックを起こしたりしているときは，課題設定に問題はなか

ったのか，対応がまずかったのではなかったか，と反省するとともに，過敏性等に関して配慮が十分だったのか，環境はどうだったのかという視点で見直すことが必要です。

また，感覚過敏等に対する「配慮」と「耐性を育てること」のバランスを考えなくてはなりません。単純に「慣れさせて耐性をつけていく」ということは避けるべきです。わざわざ騒がしいところに連れて行ったりする例もみられますが，耳栓やヘッドフォンで騒音を遮断する等の安全策を講じ，安心できることを保証することが必要です。そしてその上で自分が安心できる方法を学ぶことが大切です。高所恐怖症の人が屋根の上にいるようなものとイメージすると分かりやすいかもしれません。ただ「慣れさせる」ことよりも，まずは下を向かないように，あるいは見えないようにするはずです。それから徐々に高さに慣れていくようにしていくのではないでしょうか。

つまり，音・声・掲示物・教材・窓外の景色等の「刺激に十分に配慮し，調整する」，集団の規模を小さくする，ヘッドフォンなどで音刺激を遮断する，スケジュールが分かり見通しがもてるようにする等の「安心できる方法を学ぶ」，配慮のもとで行動できるようになったら「少しずつ耐性や柔軟性を育てていく」というプロセスが大事です。

（3）具体的対応

子どもと対応する場面においては，視線を無理に合わせない，正面に立たない，話し声を調整する，手を握る場面でも，子どもの方から握るようにする等の対応が必要です。つまり，子どもに無理に入り込まない態度が必要です。

また，余分な視覚的刺激を遮断する，音刺激に対して耳栓をする，運動会においてはピストル（信号器）を止め手旗信号にする，ボリュームを下げる等の具体的な配慮をし，安全を保証することが大事です。安全であることが分かると，非常に安定してくるものです。

さらに，視覚的なものを補助にして指示する，課題の提示に配慮する，スケジュールや手順を示し見通しをもたせる，シミュレーション（恐怖場面をどう回避するか・できるかということを含めて）を十分に行うこと等が必要です。見通しをもつことができれば，子どもは安定してきます。

もちろん一人一人違うわけで，その子に合ったものを工夫していかねばなりません。

2．シングルフォーカスの問題

自閉症のある子どもは，姿勢をコントロールすることに意識が集中し，その他の働きかけには注意をむけられないなど，種々の感覚を同時に処理することが不得手です。これは「シングルフォーカス」といって，２つ以上の情報を処理することが困難な状態です。

マッチングの学習のときに，「形」「色」の二つの属性で考えねばならない場面で混乱してしまうことなどがよくありますが，これも二つの情報を同時に処理することが困難なために起こる現象です。

また，高機能自閉症の子が，言葉通りに受け止めてしまう・ニュアンスが分からないという状態も，言葉と表情という二つの情報を同時にはうまく処理できないためと考えられます。表情に注目すれば言葉が分からなくなり，言葉に注目すれば表情が読み取れないということなのでしょう。

どの情報を受け止めて行動しているのか確認した上で，順序よく情報を提示する必要があります。

3．おわりに

自閉症のある子どもに特徴的にみられる様々な行動がありますが，その特性に配慮した対応をすることによって，見通しをもつことができ，落ち着いて学習や生活ができるようになります。

このように考えていくと，第二章で述べられるいわゆる「構造化」が必要であり，自閉症のある子どもの教育に有効であるということが理解できるのではないでしょうか。

文献

文部科学省特別支援教育課（2002）就学指導の手引き.
川崎葉子・ほか（2003）広汎性発達障害における感覚知覚異常 発達障害研究，25，31-38 .

国立特殊教育総合研究所文献

東條吉邦（2004）ADHD・高機能自閉症の子どもたちへの適切な対応. 科学研究費報告書，39-42 .